

3 命をいとおこす

- (1) 自他の生命を尊重して
- (2) 自然の偉大さを知って
- (3) 大いなるものを感じて

(1) 自他の生命を尊重して

限りあるたった一つの命だから

私たちは、たった一つのかけがえのない命をもらった。草や木にも、動物たちにも、私にもだれにでもたった一つの命。

命は、自分の力で生かしていくもの。そして、多くの人たちに生かされていくもの。

かけがえのない命、限りある命だから精一杯かがやかせたい。



読んでみよう

人類愛の金メダル

昭和三十九（一九六四）年、東京オリンピックのときのことです。

ヨット競技は、神奈川県の江の島おきで行われていました。十月十四日、この日は、風が強くとてもあれた天気でした。

ヨット競技では、選手二人が乗ってレースをします。スウェーデンチームのハママ号には、ラーズ・キエル、スリグ・キエルの兄弟が乗っていました。

ハママ号は、あれる海の波に乗り上げながら、今まさに先頭グループに追いつ

こうとしていました。

そのときです。前を走るオーストラリアのダイアブロ号が、強い風にゆらされ、乗っていたウィンター選手が海に投げ出されてしまったのです。

もう一人のダウ選手は、横だおしになったヨットのマストにつかまっているのがやっとです。その様子に気が付いたキエル兄弟は、危険にさらされている人を見過みごすわけにはいかないと、レースを中断ちゆうだんして、ウィンター選手に向かつてロープを投げ、ハママ号に救い

上げました。

その後、事故を知ってかけた救助の船にウィンター選手を送り届け、ハママ号は、レースにもどりました。しかし、結果は十一位でした。

事故を知ってかけ寄ってきた新聞記者に対して、キエル兄弟は、海の男として当然のことをしたただけだと語ったそうです。

翌日の新聞記事には、勝敗より命を大切にされたこの出来事が大きくしようかいされていきました。

この世に生を受けたものは、いつかは死をおかえます。
私たちの命の長さは、人によって様々です。
生まれてすぐなくなる人もいれば、病気や事故でなくなってしまう人もいます。また、百年以上生きる人もいます。



今、多くのひととの関わりの中で生きていく

私たちの命は、様々な人々との支え合いの中で育まれていきます。家族や親類、先生や友達など、私たちはたくさんの人たちとの関わりの中で生かされています。
命は、私たちの先祖から自分、そして私たちの子孫へと受けつがれていきます。

低学年のころ



赤ちゃんのころ



自分の命を見つめてみよう

●自分の周りの人たちに、幼いころの自分の様子やエピソードを聞いてみましょう。

今の私

●人間の誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さ、共に生きることのすばらしさなどを考えてみましょう。

小学校入学前



ぼくには、小さいころからぼくをうんとかわいがってくれたじいちゃんがいる。でも、そのじいちゃんが、あと三か月で死ぬかもしれないなんて……。

今日、学校から帰って来ると、お母さんが深刻な顔をして言った。

「話があるの……。」

ぼくは、この前のテストのことですかられるのかと、ちょっと構えた。お母さんの口調は静かだった。

「ねえ、大地……。この前じいちゃんが入院したとき、お母さんは、長生きするようにいろいろとみてもらっているのよって言ったわね。でもね、本当は……。じいちゃんは重い病気であと三か月の命と言われて……。大地にはずっと言わないでおこうと思っていただけ、やっぱりきちんと話して、じいちゃんとの残された時間を大事にしてほしいと思ったの。」

「えっ、あと三か月の命ってどういうこと？」

ぼくは頭が混乱して涙もなくトイレに閉じこもり、こみ上げる悲しさに声を上げて泣いた。目を真っ赤にはらしてやつと出てきたぼくを見て、お母さんが言った。

「お母さんだつてずうつと、もつともつとじいちゃんと一緒にいたいわ。でも、命には、いつか終わりが来るのよ。」

「じいちゃんは、病氣のこと知ってるの？」

「うん。お母さんには言えない。悲しむ顔を見るのはつらいし、それより一日でも多くじいちゃんとの限られた時間を大切に楽しく過ごしたいわ。だから、このままそつとしておこうと思うの。」

「うん……。」

次の日から、ぼくは、放課後にみんなと遊ぶのをやめて、学校から帰るとお母さんが用意したぼくの弁当を持って、自転車で病院にお見舞いに行った。

「じいちゃん。一緒に食べよう。」

「うん。大ちゃんと食べるとご飯は特別においしいからなあ。」

「いっぱい食べて早く元気になってよ。」

「うん。また一緒に温泉に行こう。」

ぼくとじいちゃんは、学校の話や小さいころの思い出話をしながら楽しく夕飯を食べた。自分で言うのも何だけど、ぼくは感心にも毎日欠かさず病院に行った。じいちゃんは、ぼくが来るのを楽しみにしていて、病院の売店でぼくの好きなお菓子を買っては、いつも枕元に置いてくれていた。

でも、日に日にじいちゃんはやせていった。一か月もたつと痛みのために強い薬を使うようになって、意識がもうろうとするときがあった。そんなときは、食事どころか話もできなくて、ぼくは静かにベッドのそばのいすにすわって、目を閉じているじいちゃんの顔を見て話した。

「じいちゃん、元気出してね。注射は痛いけど良くなるためだよ。頑張らないと駄目だよ。早く良くなって一緒に温泉に行こうね。」

そんな日の帰り道は、うんとペダルが重かった。もう、このままじいちゃんと話せなくなる

もっとう
ぼんやりとして、はっぴり
しない様子。

のかと思うと、悲しくて力いっぱい自転車をこいだ。

お母さんに言われてから約三か月がたった。じいちゃんの食事は点滴に代わった。もう二人で一緒に夕飯を食べることはできなくなった。でも、ぼくは（今日は、話せるかな。）と、小さな期待を胸に大好きなじいちゃんに毎日会いに行った。

そんなある日、学校から帰るとお母さんがいなかった。玄関に紙がはってあった。『お帰り。病院にいます。』言い知れぬ不安がぼくをおそった。ぼくは、無我夢中で家を飛び出した。

じいちゃんは酸素マスクを付けられて、ピツ、ピツという機械の音だけが病室にひびいていた。瞬時に、ぼくはいろいろなことを察した。

ぼくは、目を閉じて静かに横たわっているじいちゃんの手をにぎった。小さいころから何千回もつないでもらったじいちゃんの手だった。「ハア、ハア。」静かな病室には、じいちゃんの息づかいだけがあった。ぼくはじいちゃんの耳元で言った。

「じいちゃん。きつと元気になるよ。もう少ししたらきつと良くなるよ。そしたら、じいちゃんの大好きな温泉にまた一緒に行こうね。ぼくが連れて行ってあげるよ。だから、じいちゃん。元気出してよ。頑張るんだよ。」



そのときだった。じいちゃんは無言のまま、このぼくの手を弱いながらもにぎり返してくれた。その夜おそく、じいちゃんは、ぼくと手をつないだまま天国に旅立った。ぼくは、どうしようもないぐらい悲しくて、じいちゃんの布団に顔をうずめて声を上げていっぱい泣いた。しばらくたって、看護師さんが、じいちゃんの酸素マスクを外そうとちよつと頭を持ち上げてまくらを外したときだった。

「あらっ……。」

じいちゃんのみくらの下にあったのは、しわくちゃののしぶくろだった。

「大ちゃんへ。お誕生日おめでとう。いつもお見舞いに来てくれてありがとう。これからもずっと大ちゃんのことを見守っているよ。」
ふるえて力のないじいちゃんの字だった。

ぼくの誕生日は、一か月も先だった。

「じいちゃん……。」

じいちゃんの温かな、そして強い思いがぎゅっとぼくの胸いっぱいにおし寄せた。



かけがえのない命

命でんでんこ

僕は思う。あの日の体験をこれから生きていく人々に伝えたい。

三月十一日、十四時四十六分、大きな地震が東日本を襲った。僕たちは体育館で卒業式の練習をしていた。先生の声で校庭に出た。校庭はまるでゼリーのようになり、波打ち、泣き出す人もいた。みんなで励まし合いながら恐怖に耐えていた。そして、「逃げる。」という声が出て、何がなんだかわからないまま、僕たちは学校の裏山に登った。津波はものすごい速さで町を飲み込み、さっきまでの町並を一瞬でがれきに変えてしまった。声も何も出なかった。ただこわくて体が震えた。津波を目の前で見て、何もできない僕たちはおろおろするだけだった。

その日は、全校生徒が田老総合事務所で一晩を明かした。消防団の父さんに、夜二十三時頃に会えてとても安心したが、寝るにも寝られない夜だった。夜が明け、外を見ると、がれきの上に雪が積もっていた。昔から津波の次の日は雪が降るといふ言い伝えがあるらしい。言い伝えのとおりすぎて驚いた。そして、がれきの上の雪は僕たちをますます悲しくさせた。

明るくなるにつれ、家の人が出てきて、みんな家へと帰って行った。家の人に来るたびに、

涙を流す仲間の姿を見送った。

三日目、千徳の祖父の家に行った。電気も水もガスも復旧していて、その違いに驚いた。でも僕はなんだか落ち着かず、じっとしていられなかった。「父さんと一緒に消防団の仕事を手伝いたい。」と言った。生きている人がいるかもしれないと、一生懸命にがれきの中を父さんと歩いた。

僕ががれきの中を歩きながら思ったことが二つある。一つは「命でんでんこ」という言葉の深い意味。命より大切なものはありません。どんなことがあっても逃げることを考えてください。命があればどうにでもなります。未来に向かって歩き出せます。

もう一つは、負けたくないと思っただけです。田老は今まで何度も津波の被害にあい、それを超えるてきた町です。校歌の三番には田老一中生の進むべき道が示してあります。

防浪堤を仰ぎみよ

試練の津波幾たびぞ

乗り越えたてしわが郷土

父祖の偉業や跡つがん

僕はある日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと思いたい。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。

(2) 自然の偉大さを知って

自然のめぐみを共有して



東北地方に「布施がき」という風習がある。
厳しい冬を前にした秋、
かきもぎの作業をするときに
その全部をとらずにいくつかを残しておく。
そう、それは他の生き物たちのために。

この地球の大自然は

人類が誕生するよりずっとずっと昔から
長い長い時間をこえて存在してきた。
私たちはこの大いなる自然に生まれ、
生きている。

人は豊かな自然のめぐみに
感謝しながら生きている。
自分たちのことばかりでなく
過酷な自然の中で生きている
他の生き物たちに心を通わせ
人はかきの実を枝に残す。



私たちに何ができるのだろうか

わたり鳥は、
豊かな自然を求めて、
はるか空の旅を続ける。
鳥たちの行き着く先には、
めぐまれた自然が
なくてはならない。
しかし、日本をふくめ、
世界の各地で
自然環境の悪化が
大きな問題となっている。
私たち人間は、
どうやってこの自然を
守っていくことが
できるだろうか。



● 私にできること

話し合ってみよう

こわされていく自然環境

自然は一度こわれてしまつたら

簡単には元にもどらない

年々とけていく南極の氷河

白化したサンゴ



日本での絶滅が心配されている生物



タンチョウ



リュウキュウヤマガメ



オオクワガタ



イリオモテヤマネコ



ニッポンバラタナゴ



クマガイソウ

なぜ自然破壊が起こるのかをみんなで話し合ってみましょう。

自然をこよなく愛した人



潮や風……、

あらゆる自然の力を用ひ尽くして
諸君は新たな自然を形成するのに
努めねばならぬ。

宮沢賢治
（一八九六―一九三三）
詩人・童話作家

数々の作品の舞台(ぶたい)となった岩手山



賢治が名付けたイギリス海岸(北上川)

詩人で童話作家の宮沢賢治は、子供のときに、石を集めるのが好きで、石を拾ってきてはながめていたそうです。

賢治の書いた童話には、石が出てきます。「銀河鉄道の夜」には、サファイア、トパーズなど。くじやく石は「ひかりの素足」に、こはくは「マグノリアの木」に、そしてアメジストやルビー、ダイヤモンドは「十力の金剛石」に出ています。

子供のころから、石や虫などに興味をもち、岩手山などの雄大な自然に囲まれて育った賢治は、豊かな感性で自然と心を通わせていました。その自然に対する思いは、賢治の作品に散りばめられています。

(3) 大いなるものを感じて

人間の力をこえたものに感動し、心を打たれることがある

雨上がりの虹、真っ赤な夕日、
かがやくオーロラ。
おし寄せる流氷、水しぶき上がる滝。
自然が織りなす現象や景色に圧倒され、
心を打たれることがある。

人間の力をこえた神秘的な世界に
向き合ったとき、
大いなる自然の美しさや偉大さを感じる。
そしてそれらに感動する
人間の心のすばらしさをかみしめる。



夕日 (和歌山県)



アルゼンチンとブラジルにまたがる
「イグアスの滝」

美しい地球 生命宿る地球

青い空に浮かぶ白い雲を見上げたことがあるでしょう。その雲を突き抜けてロケットに乗ってさらに昇ってゆくと、空の青い色がだんだん濃く黒ずんできます。しまいには空は真っ暗になり、星がたくさん光って見えてきます。

そこはもう空気のない宇宙です。しかしそんな真っ暗いなかでも太陽を見ると目が開けられな
いほど白くまぶしく輝いています。目をそらして、ここまでロケットであがってきた方向を振り
返ると、太陽に光を浴びて、青く、白く輝く大きな地球が丸く浮かんでいます。

青い色は地球を取り囲む大気と水です。白い色は今突き抜けてきた雲です。雲は丸い地球の表
面にくっついていてるかのように、つながってたくさん浮いています。その雲の下には約七十億人
ものひとびとが住んでいます。その中にはもちろん家族も友人もすべてのひとびとが含まれます。
人間だけではありません。五千万種とも言われるたくさんの生物も一緒に生きています。空気、
水そして太陽の光のおかげでこんなにたくさん生命が地球上にあふれています。どの生物も宇
宙からはあまりに小さくて肉眼で一つ一つを識別することは不可能です。宇宙からは見えな
けれど、確かに昔から生命は地球上で、お互いにずっとかわりながら生き続けてきました。宇宙
は空気や水がないので、私たちが一瞬たりとも生きてはいけない場所です。

そう考えながら、あらためて美しく輝く地球を眺め「人間は多くの他の生命を大事にしな
がら一緒に生きてゆくことが大切だ」と、心から思いました。

毛利 衛
(宇宙飛行士)

奥村土牛は、明治二十二（一八八九）年、東京に生まれました。土牛という名は、「生まれた年がうし年ということもありましたが、牛が石ころの多いあれ地を耕し、田に変えるように、おそくともよい、たゆまず根気よく、美しい物を探し続けなさいという願いで付けたものだと思う。」と土牛は語っています。

「自然には、どんなものにも命がある。私は、その命の美しさを、この筆でえがき続けたい。」それが土牛の願いでした。百歳のとき、土牛は平成の富士をえがく決心をしました。思うように体は動かなくても、気力で絵筆をにぎる日々が続きました。土牛にとっては、富士山の秘められた美しさは、えがいてもえがいてもつきないもののように思えたのです。

途中、何度か体調をくずしながら、平成二（一九九〇）年の秋、新作「平成の富士」を出品すると、多くの人々はその出来栄に心を打たれました。このとき土牛は百歳。この絵は「百歳の富士」としてたたえられたのです。

6年

5年

●人間の力をこえていると思えるものに出会い、感動したのはどのようなときですか。



日本画「平成の富士」奥村土牛作

美しいものを探して



奥村土牛
（一八八九〜一九九〇）
日本画家。
「鳴門」「醍醐」「吉野」などの作品がある。



芸術に完成はありません。大事なことは、どこまで大きく、未完成で終わるかです。

奥村土牛